

時岡隆先生ご遺稿発見と出版までの経緯について

The circumstances of discovery and publication of the posthumous manuscripts of late Professor Takasi Tokioka (1913–2001)

宮崎勝己 Miyazaki, Katsumi

京都大学瀬戸臨海実験所 (〒649-2211 和歌山県西牟婁郡白浜町 459)

今年 2013 年は、実験所元所長で京都大学名誉教授でもある時岡隆先生 (1913–2001 年) の生誕 100 周年にあたる。今更説明するまでも無いことであるが、時岡先生は稀代の動物分類学者であり、特に尾索動物類・毛顎動物類、そして有櫛動物類については、それらの類の分類学における第一人者の地位を長年にわたり保ち続けられた。この事は、亡くなる前の年の 2000 年に出版された「動物系統分類学 追補版」において、「有櫛動物」と「毛顎動物」の章 (時岡, 2000a, b) を、「動物系統分類学」本編 (時岡, 1961, 1965) に引き続き担当されたという事実、如実に示されている。

さて先生の生誕 100 周年を迎えるにあたり瀬戸臨海実験所では、同じく元所長の内海富士夫先生の生誕 100 周年と水族館開館 80 周年を記念し 2010 年に開催した特別展「内海富士夫展」に引き続き、時岡先生の業績を顕彰する特別展「時岡隆 生誕 100 年記念展」を京大白浜水族館で開催することを決定し、大和茂之助教、加藤哲哉技術職員に筆者を加えた 3 人のメンバーで、準備のためのワーキンググループを立ち上げた。ワーキンググループでは先生に関する資料を網羅的に収集・整理すると共に、ご遺族である長女 時岡美恵氏及び長男 時岡隆志氏の協力を仰ぎ、先生に関する聞き取りを行い、更に特別展の展示や解説に利用するための資料として数多くの先生の遺品を借り受けることとなった。

これらの遺品についてはワーキンググループのメンバーで随時整理を行っていったが、その過程で英文の打ち出し原稿と手書き原稿が入った茶封筒が見つかった。"A speculation on the classification system of the Ctenophora"と題されたその原稿は、書かれていた内容と同封された図 (原図ではなくコピー) から「動物系統分類学 追補版」の「有櫛動物」の章 (時岡, 2000a) に追記・増補し、英語化したものと判明した。程なくして、同じ題名の文書ファイルが実験所図書室のパソコン内にあるとの情報が、図書室職員の興田道子氏からもたらされ、両者を照合したところ、打ち出し原稿に先生が書き込まれていた修正を反映した、より新しいバージョンの原稿ファイルであることが明らかとなった。

興田氏によると、確かに先生の晩年の頃に、手書き原稿のタイプ打ちと打ち出し、また打ち出し原稿に書き込まれた修正の反映作業を先生から依頼されたとのことである。発見されたファイルの最終保存日時は 1999 年 5 月 3 日 16 時 24 分と記録されており、先生が亡くなった 2001

年 9 月 30 日とは 2 年以上の開きがあるが、筆者が 1999 年 10 月に 1 年間の在外研究から帰国した後は、先生は持病の心臓病の悪化のせいか、ほとんど家の外に出て来られなくなってしまい、図書室などでしばしば元気な姿を拝見した出国前の状態から随分と変わってしまったという印象を強く持っている。いずれにしても今回発見された原稿ファイルの内容は、先生が長年にわたり追求されてきた「有櫛動物の分類体系」の最終形に近いものであると拝察され、その学術的価値を勘案して、実験所として何らかの形で公表すべきということになった。

議論の結果、公表の場として "Publications of the Seto Marine Biological Laboratory" を提供し、そこにより新しいバージョンの原稿を改変無しに掲載することとした (Tokioka, in press)。またこの原稿での論考において重要な役割を果たしているクシクラゲ *Lobatolampea tetragona* の発見者で、時岡先生のアドバイスの元、この種の記載論文 (Horita, 2000) を完成させた東海大学海洋学部准教授の堀田拓史氏に、今回の遺稿原稿に対するコメントや補足の内容を含んだ原稿の執筆を依頼した。堀田氏はこの依頼を快諾され、「今回発見された時岡隆先生のご遺稿に対するコメント」「時岡先生との出会い」の二つの原稿を投稿していただいた (堀田, 2013a, b)。堀田氏の前者の原稿については、その内容を要約し、それに遺稿発見の簡単な経緯を付け加えた英文原稿を筆者が作成した (Miyazaki, in press)。また打ち出し原稿と共に封筒に入っていた手書き原稿の内容は、より新しいバージョンの原稿に反映されておらず、これについては全文をこの英文原稿に採録すると共に、堀田氏による翻訳が「今回発見された時岡隆先生のご遺稿に対するコメント」中に掲載されている。

以上が今回の時岡先生ご遺稿の発見と、出版に至るまでの一連の経緯である。

参考文献

- Horita, T. 2000. An undescribed lobate ctenophore, *Lobatolampea tetragona* gen. nov. & spec. nov., representing a new family, from Japan. *Zoologische Mededelingen*, 73, 457–464.
- 堀田拓史. 2013a. 時岡先生との出会い. 瀬戸臨海実験所年報. 26, 34–35.
- 堀田拓史. 2013b. 今回発見された時岡隆先生のご遺稿に対するコメント. 瀬戸臨海実験所年報. 26, 36–44.

- Miyazaki, K. (in press). Annotations by Takushi Horita on Tokioka's paper. Publications of the Seto Marine Biological Laboratory, 42.
- 時岡隆. 1961. 有櫛動物. 動物系統分類学第 2 卷, pp. 205-233, 中山書店, 東京.
- 時岡隆. 1965. 毛顎動物. 動物系統分類学第 8 卷上, pp. 259-292, 中山書店, 東京.
- 時岡隆. 2000a. 有櫛動物. 動物系統分類学追補版, pp. 80-84, 中山書店, 東京.
- 時岡隆. 2000b. 毛顎動物. 動物系統分類学追補版, pp. 205-233, 中山書店, 東京.
- Tokioka, T. (in press). A speculation on the classification system of the Ctenophora. Publications of the Seto Marine Biological Laboratory, 42.